

「もとはこちら」のお話し

№37 今月のテーマ 祈りの心 願いの心

2010年（平成22年）1月16日（土）



平成7年1月24日
致知出版社発行

神を前にして

願いごとや 祈りごとをするのは、慎みなさい。
いたずらに、

自分のエゴを神に向かって祈るのは、やめなさい。

祈る時、願う時は、己れ自身を前にして、
自分と 自分に祈りなさい。

（平井謙次 「生まれ来し その第一義」より）

明けましておめでとうございます
皆様におかれましては、お健やかに新春をお迎えになられたことと、お慶び
申し上げます。

北原ゆり筆

さて、今年も初詣でにいらっしゃる方も多いと思いますが、ある年のこと
です。

三つか四つぐらいと思われる小さな女の子が、お母さんに手を引かれてやっ
てきました。愛くるしい振袖姿のその子は、ひらひらと揺れる髪飾りを付けて
もらい、口には小さく赤い紅もさしてもらっています。

同じく華やかな着物姿の若い母親が、その子にお賽銭を手渡ししながら、言
いました。

「ほら、これをこの箱に入れるのよ。それから手を合わせて、神様にいっ
ぱいのお願ひ事をするのよ」。

女の子は、言われた通り、手の中のをチャリンとお賽銭箱に入れ、小
さな手を合わせ、何かお願ひ事を始めました。母親も自分の手の中のをチャ

リン、チャリンと箱に入れ、女の子の横でぽんぽんと拍手を打って、お祈りな
らぬ、お願ひ事を始めました。

この親子のほかにも大勢の人が次々と神前に立ち、拍手を打ち、あるいは二
礼三拍手一礼などをして手を合わせ、神妙に頭を垂れています。

お祈りを済ませた人たちは、早々と次の人に場を譲って、しゃべりざわめき
ながら、おみくじや絵馬などの売り場の方へと向かいます。

神殿をバックに写真を撮る家族連れや恋人らしき人たち、境内の木
の枝におみくじをくくりつける人たち、そして漂ってくるお好み焼きや、タイ焼きなど
の良い香りに誘われ、早く買いに行こうとねだる子供たちの声などが
いりまじり、いつもは静かなこの神社も、いかにもお正月らしく、賑やかで楽しい
雰囲気になっていきます。

どっと繰り出したこれら善男善女、そして子供たちが、神仏の存在を信じて
初詣でにやって来たのか、それともただ単に、楽しいお正月の行事の一つとし
て、うきうきとやって来たのかは別として、神前で手を合わせ、頭を垂れて祈
る人の姿というものは、いつ見てもなかなか良いものだと思います。

貧者の一灯

ところで、年も改まろうかという大晦日の夜、思い立って高野山にお参りした事がありました。

さすがに真冬の高野山だけあって冷え込みも厳しく、参道の脇にはうっすらと雪も積もっており、あたりの空気はりと静まりかえっております。



私達の他にはお参りの人ひとりとしておらず、奥の院の扉も閉ざされておりました。それで、その時は扉の外からそっとお参りして帰ってきたのですが、この奥の院の最奥部には燈ろう堂というところがあります。

ここには何万人もの信者によって奉納された沢山の燈ろうがいつも灯されていて、中に入れば、真冬でも暖かいと感じるほどです。

この高野山には貧者の一灯と呼ばれる明かりがあると聞いた事があります。

それは、極貧の生活の中から、何とか工面してやっとの思いで奉納した、お照するという名の娘の灯だということです。

この小さな灯は、今にも消えてしまいそうでありますが、消えることなく、他の人達が先を競うようにして奉納した太くて立派な口ウソクが、一陣の風に吹かれてすべて消えてしまったその後も、平安時代より今に至るまで明かりを灯し続けているということです。

また六世紀の中国での話ですが、武帝という国王が、仏教の教えに触れていたく感銘を受け、布教の為に大層な尽力をされました。

その武帝が、かねてより敬愛してやまない、あの達磨大師に会った時、

「私はこれまで沢山の寺院を建立し、また多くの僧侶をも養成しました。仏法のためにこれほどの働きをした私には、一体いかにどの功德くどくがあるものでしょうか」と尋ねました。

きつと、「その働きに応じた特別な功德、計り知れない程のご利益がある」と言われるものと期待していたところ、達磨大使は言下にひと言、こう言われたそうです。

「無功德」。

どれ程の功績を積もうと、特別な功德などは何もないというのです。



さてまた別の話ですが、お寺の改修工事の為に多額の献金をした人が、ある日、寺の住職に町でばったりと出会いました。

そこでお礼のひとつとも言もあるだろうと思っていたところ、意に反して住職は何も言わない。

腹を立てて、「あれほど多額の献金をしたというのに、お礼の一言もないとは、どういうわけだ!」と怒ったところ、「なんで私があんたに、お礼を言わなきゃなんのか?」と、逆に問い返されたというのです。

一般常識からすれば、献金を受ければそれに応じて、お礼を言うというのが普通かもしれません。

しかしそういう凡俗の慣わしとはまた別の、仏の世界というものがあるのです。

それは、人とは、善い事をする事によって、向上浄化するという事です。

ですから、善い事をしたからといって、何も人からお礼などを言われる必要は無いのです。

住職にしてみれば、「善い事をしたその功德によって、あんたが向上浄化したのであって、その事に対して、なんで私がお礼を言わねばなんのか?」という事になるのです。

善い事をすれば、そのこと自体が喜びであり、その人の功德となるのです。

もしも誰かにお礼を言ってもらおうとか、或いは何らかの見返りを求めるような思いで行ったのであれば、それは善行でも何でも無い偽の善であり、よって功德も何ありません。

ご利益信仰だけでは恥ずかしい

世間では、ご利益信仰というのが流行っていて、ご利益を求めて、せっせと献金やお布施をしながら神様詣でをする人も多いようです。しかしそれは間違いです。



本当の神様は、自動販売機ではありませんから、お金や物で、幸せを売ったり買ったりは致しません。

ましてお賽銭(さいせん)の多寡によって区別したり、差別をしたりという事はありません。

見返りをもとめつつ神前に立ち、わずかなお賽銭で今年一年分の家内安全、無病息災、交通安全、そしてもしかしたら商売繁盛もと、いっぱいのお願いをすることでは、いかにも恥ずかしい気が致します。

本来、お参りをするという事は、神仏に対して祈りを捧げるという事です。

祈るという事は、自分の心を集中して神仏に向け、神仏と自分がひとつになるということであり、祈りと願いは全く異なるものなのです。

いつも見守り続け、導き続け、そして自分の行為に一番叶った結果を与え続けて下さっている神仏に対し、その神仏と一体となるように心身を統一し、雑念からも離れ、心からの感謝を捧げることが、本来のお参りの筈です。

ですから、できれば年が改まってからよりも、年の内に参拝し、真心の上に何かお賽銭などを添えるのならば、本当に謙虚な姿勢で

「今年一年間、本当にありがとうございました。わずかですが感謝の気持ちです。」

どうぞ神様の為、皆様の為にお役立て下さい」と心を低くして差し上げるのが、正しいお参りの姿ではないかと思えます。

決して小我の欲望達成の為の願い事などはしてはならないのです。そしてその上で、年が明ければまた改めて、新年のご挨拶に上がるというのがお参りの順序というものです。

一挙手一投足が神への祈り

しかし本当は、神社仏閣にお参りし、お祈りした時だけ、私達の心が神仏に通じるわけではありません。



私達のすべてが、常時、神には通じているのです。

意識的、無意識的の如何に関わらず、一瞬一瞬の自分の想い、一挙手一投足が波動となって、祈りとなって四六時中、神には届いているのです。

通じているからこそ、その人の想う事、言う事、する事に応じて、それに丁度見合った事を、神仏は私達に与え続けて下さっているのです。

ですからあの武帝がどういう心根で莫大な寄進をしたかという事も、神仏はちゃんと分っている筈です。

達磨大師の言われた「無功德」という事については、一般的には「神仏からの見返りを求めるような、そんなさもしい心でやった偽善に対しては、功德等は一切無い」というような解釈がなされているようですが、ただそれだけではないように思います。

「何も改めての見返りなどは求めなくても、お前の行為の全てに對し、神仏はそれに一番ふさわしいものを、常に与え続けているで

はないか。だから改めての褒美などは何も無い」という事です。

もしも武帝の行為が、自分に対する何らかの見返りを求める為の行為であったとすれば、当然、その不純な想いにふさわしい結果が与えられるであろうし、反対に、純粹に民の為、仏法の為に思っ
て成された行為であったのなら、またそれにふさわしい結果が与えられるだろうという事です。

誰に対しても平等に、その人のした行為に対し、一番ふさわしい結果を与え続けるのが神であり、そこには身分の違いも貧富の差も一切関係ありません。

「法以外の結果などは、どこにも無い」、そういう意味での「無い」であつたように思います。

ところで、キリスト教系の幼稚園に通うようになった子供が、教会から献金を促され、「なんで神様はお金をほしがるの？」と聞いて、親を困らせたそうです。

その子は、「もしもお金をあげるのなら、これはお母さんにあげる」と言つて、きかなかつたそうです。

見た事も会つた事もない神様にあげるよりも、いつも自分の傍にいて面倒をみってくれる、私の大好きなお母さんにあげると言うのです。

大人である私達は、目にも見えず、また音にも聞こえずとも、この宇宙いっぱいには偏在し、いつも私達を見守り続けて下さっている神仏の存在を、先ずははっきりと自覚することが大切です。

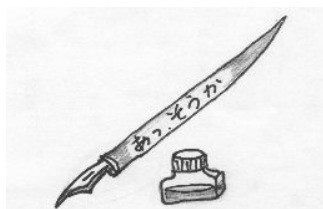
そのうえで、我が命の大元である神仏に対し、この幼子の母に対する気持ちのように、素直で純粹な心で、お願い事ではなく、感謝の祈りを神仏に捧げられるような自分になることが大切ではないか

と思います。

そして神前で拍手を打つ時も、神様を呼び出すというような心の姿勢で打つのではなく、例えば素晴らしい音楽の演奏などを聴いた時、その喜びや感動を拍手喝采で演奏家に伝えるように、日頃の感謝と喜びの心を、心を込めて謙虚に、拍手を打つという形で伝えることが出来れば、神様仏様も多いに納得して下さいるのではないかと思います。

今年も皆様と共に、平井先生の教えである、もとはこちらの勉強をより進め、研鑽を深めてまいりたいと思います。そして全ての人に対し、より幸せな一年になる事を心よりお祈り申し上げたいと思います。

平成二十二年 元旦



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com